

『庖厨備用倭名本草』における 『訓蒙図彙』初版本の引用

張 艶軍

Citation of the first edition of *Kinmōzui* in *Houchuu biyou wamyou honzou*

ZHANG Yanjun

摘要

在《訓蒙図彙》の五个版本中，元禄版本与初版本の版面、内容相比，发生了很大的变化。元禄版本删除了初版本中的和名、汉名、词义等内容，取而代之的是增补了本草学中的药效。

木村阳二郎指出，元禄版本中增补的药效来源于《本草纲目》和向井元升的《庖厨備用倭名本草》。实际上《庖厨備用倭名本草》不但是元禄版本中药效内容的出典之一，同时《庖厨備用倭名本草》中也有八例是引用了初版本。

在初版本出版五年后，即寛文十一年（1671），向井元升编写了《庖厨備用倭名本草》。作为江户时期最早的本草书，《庖厨備用倭名本草》于向井元升逝世后的贞享元年（1684）出版，它收录了加贺藩主前田纲纪膳食所需的动植物，并列出了大量易于理解的动植物的和名。

《庖厨備用倭名本草》中有八例是引用了《訓蒙図彙》初版本，其中四例引用了初版本中的和名。本文通过对这四例进行探讨，弄清楚了向井元升引用初版本的原因是为了收集和名。

キーワード：庖厨備用倭名本草 中村惕斎 訓蒙図彙 寛文六年初版本

はじめに

木村陽二郎氏⁽¹⁾、小林祥次郎氏⁽²⁾、石上阿希氏⁽³⁾、楊世瑾氏⁽⁴⁾の研究に拠れば、

現存する『訓蒙図彙』版本は、①寛文六年（一六六六）初版本（以下、初版本と略称）・②寛文八年（一六六八）頭書本（以下、頭書本と略称）・③寛文九年（一六六九）～元禄五年（一六九二）無刊記本（以下、無刊記本と略称）・④元禄八年（一六九五）元禄版本（以下、元禄版本と略称）・⑤寛政元年（一七八九）寛政版本（以下、寛政版本と略称）である。

『訓蒙図彙』版本五種のうち、①初版本を大きく改訂しているのは、④元禄版本である。④元禄版本では、①初版本が重視した和名・漢名・語義等の多くを削除し、その代わりに、本草学の薬効の記事を増補した⁽⁵⁾。

④元禄版本から増補された薬効の記述の出典として、木村氏は『本草綱目』『庖厨備用大和本草』（『庖厨備用倭名本草』）を指摘された。

本文はそれでは誰が書いたかわからないが、叙文も変化がないし、またこの頃には中村惕斎は健在であったから、惕斎自身かと思う。本文を草するにあたっては、おそらく動植物では『本草綱目』や、向井元升の『庖厨備用大和本草』（一六八四）などを参考にしたのではなかろうか。野必大の「本朝食鑑」（一六九七）や貝原益軒「大和本草」（一七〇九）はまだ出版されていなかった。薬用が主となっていてこの版は本草書といってよい。本書は増補というように図の数は増している。たとえば動物は初版では三一二、本書では三八九、植物は初版では三五四、本書で三九五である。増補で増したものは唐土のものが多い⁽⁶⁾。

このように、従来、④元禄版本が、『庖厨備用倭名本草』（以下、『庖厨』と略称）を引用することが指摘されてきた。しかし、『庖厨』には、①初版本の引用が八例確認される。

①初版本刊行五年後の寛文十一年（一六七一）に、貝原益軒の師・向井元升^{むかいげんしやう}撰の本草書『庖厨』が撰述された。『庖厨』は、江戸期最初の本草書として知られ、向井元升没後の貞享元年（一六八四）に版行された。『庖厨』は、加賀藩主・前田綱紀の厨房の調理人のために、藩主の食膳に供する食材の動植物を収載する。調理人が分かりやすいように、なじみのある和名を数多く掲出している。

『庖厨』のすべての項目を調査し、『庖厨』には、『訓蒙図彙』①初版本の引用が八例確認される。

本稿では、『庖厨』所引『訓蒙図彙』①初版本の八例を検討し、向井元升が『庖厨』に掲載する和名を収集するために、①初版本の和名を引用したことを明らかにする。

1. 向井元升と『庖厨備用倭名本草』

向井元升撰『庖厨備用倭名本草』は十三巻あり、藩主の食膳に供する食材の動植物は、第二巻～第十二巻に集中し、全四百五十九種を収載する。第一巻は、叙文・質疑であり、第十三巻は、茶の入れ方や茶道具などに関する茶道の知識である。『庖厨』諸巻

の部立ては、次のように記されている。

- 卷一 叙文・質疑
- 卷二 稻類・稷粟類・麥類・麻類・菽豆類・禽造類・炊蒸類（計42項）
- 卷三 葷辛類・柔滑類（計35項）
- 卷四 柔滑類・葷菜類・水菜類（計46項）
- 卷五 芝栴類・野菜類・木部・禽造類（計43項）
- 卷六 五果類・山果類（計36項）
- 卷七 夷果類・葷果類・水果類・造果類（計38項）
- 卷八 鱗類（計88項）
- 卷九 龜鼈類・蚌蛤類（計34項）
- 卷十 原禽類・水禽類・林禽類（計54項）
- 卷十一 豢畜類・野獸類（計23項）
- 卷十二 造釀類・調飪類・雜類（計20項）
- 卷十三 茶部

上記十三巻のうち、第一巻の向井元升撰「庖厨備用倭名本草叙」には、『庖厨』の編纂意図・経緯・引用書目について、次のように記されている。

【本文】

此君嘗^テ慎^ミ 狼^一 生^ヲ 膏^一 梁^{不^レ登^ヲ} 常膳^ニ 自^{カラ} 安^ス 淡^一 薄^ヲ 老^一 臣衆^一 臣共^ニ 恐^ル 淡^一 薄^一 之乏^メ 養^一 精^ニ 而氣^一 體不^{トキハ} 剛^一 健^{ナラ} 則性^一 行^モ 亦^タ 不^{ンコトヲ} 耐^ヘ。於^テ 是^ニ 老^一 臣前^一 田對^一 孛孝^一 貞^一 欲^ス 辨^シ 食^一 物^ノ 良^一 毒^ヲ 為^テ 書^一 篇^ヲ 備^ヘ 之^ヲ 庖^一 厨^ニ 以^テ 使^レ 膳^一 夫^ヲ 無^ラ 調^一 飪^ノ 之失^上 遂^ニ 投^{シテ} 書^ヲ 需^ム 之^ヲ。余不^一 敏^{ナリ} 也、何^ノ 足^ン 以^テ 當^{ルニ} 之^ニ。然^{トモ} 亦樂^ム 有^{ンコトヲ} 補^ヒ 仁^一 君養^一 生^ノ 之萬^一 一^ニ。卒^ニ 應^ス 其^一 需^ニ。於^テ 是^ニ 取^テ 東^一 垣先^一 生食^一 物本草^ヲ 略^ク 譯^{シテ} 之^ヲ 以^テ 時^一 珍先生^ノ 綱^一 目^ヲ 助^ケ 之^ヲ。其倭^一 名^ハ 主^ニ 源氏倭名鈔^ヲ 助^{ルニ} 以^ス 林氏多識篇^ヲ。謹^テ 附^{シテ} 臆^一 說^ヲ 以^テ 為^ス 俗^一 解^ト。

【訓読】

此の君、嘗て養生を謹み、膏梁、常膳に登ることをなさず、自ら淡薄を安ず。老臣・衆臣共に、淡薄の養精に乏しくして、気体剛健ならざれば、則ち性行も亦た耐へざらんことを恐る。是に於いて、老臣・前田対孝貞、食物の良毒を辨じ、書一篇を為して、之を庖厨に備へ、以て膳夫をして、調飪の失を無からしめんことを欲（ねが）ひ、遂に書を投じて、之を需む。

余の不敏たるや、何ぞ以て、之に当るに足らん。然れども、亦た、仁君養生の萬一に補ひ有らんことを樂はむと、卒に其の需に応ず。

是に於いて、東垣先生『食物本草』を取りて、略之を訳し、時珍先生の『綱目』を以て之を助く。其の倭名は、源氏『倭名鈔』を主として、助くるに林氏『多識篇』を以てす。謹みて臆説を附して、以て俗解と為す。

【試訳】

わが主君・前田綱紀公は、かねてより健康管理に努め、脂ののった肉や精米を日々の食膳にあげることはなく、自ら淡泊な食事を心がけておられた。しかし、老臣・多くの臣下は、淡泊な食生活は滋養に乏しく、気力も体力も剛健にならないので、綱紀公の性格・行動が主君の任に堪えなくなることを恐れた。そこで、家老・前田孝貞は、食物の良し悪しを判断するため、書物一篇を作り、これを厨房に備えて、料理人が調理の（食材の）を間違えないようにするにしようと、ついにその書物を求めた。

私、向井元升は能力が低く、どうして、その任に当たることができようか。しかし、優れた仁君綱紀公の健康管理のため、万に一つでもこれを補う（少しでも貢献できる）ことができるならと、とうとうその依頼を引き受けたのである。

こうして、（李）東垣先生の『食物本草』を引用してほぼこれを訓読し、（李）時珍先生の『（本草）綱目』によって補訂した。その和名は、源氏（源順）『倭名鈔』を主として、林（羅山）氏『多識篇』で補訂した。謹んで私の臆説を加え、一般の人々にもわかりやすいように解説した。

向井元升撰「庖厨備用倭名本草叙」から、次のことが確認される。

第一に、『庖厨』は加賀藩主・前田綱紀の食膳を司る料理人の参考書として、加賀藩家老・前田孝貞の依頼により、向井元升が撰述したものである。

第二に、「東垣先生『食物本草』を取りて、略之を訳し、時珍先生の『綱目』を以て、之を助く。其倭名は、源氏『倭名鈔』を主として、助くるに林氏『多識篇』を以てす。謹みて臆説を附して以て俗解と為す」という叙文から、『庖厨』の引用書目が確認される。つまり、漢籍は、中国の著名な医学者である李東垣の『食物本草』、李時珍の『本草綱目』を参考している。和名は、源順の『倭名類聚鈔』を主な参考とし、林羅山の『多識篇』を補足として用いた。さらに、藩主の厨房の料理人をはじめ、一般の人々にも分かりやすいように、向井元升の解説を付している。

2. 『庖厨備用倭名本草』「巻之首の質疑」における和名

『庖厨』第一巻の「巻之首の質疑」では、向井元升は『庖厨』の編纂にあたって、和名を記載した先行文献を論評する。また、料理人が使いやすく編纂するために、俗語・俚言を雑多に記載し、和名を重視している。『庖厨』「巻之首の質疑」における先行文献の論評と、和名重視について、次のように述べられている。

【本文】

○凡^リ 倭^ノ 名^ノ 之^ニ 書^有 源^氏 倭名鈔^ニ 有^リ 林^氏 多識篇^ニ 有^リ 中村氏^ノ 訓蒙図彙^ニ 俱^ニ 便^{シテ} 于^ニ 學者^ノ 参^考 不^レ 載^セ 食^ノ 物^ノ 藥^ノ 品^ノ 之^ノ 性^ノ 味^ヲ 有^リ 深^江 氏^ノ 倭名本草^ニ 有^リ 延壽院^ノ 日用食性^ニ 有^リ 安田氏^ノ 食品^ニ 俱^ニ 便^{シテ} 于^ニ 醫^者 之^ノ 自^ノ 考^ニ 不^レ 便^{アラ} 于^ニ 病家^ノ 撰^用 用^ニ 其^ノ 倭^ノ 名^ノ 本草^ハ 載^テ 藥^ノ 品^ヲ 不^レ 載^セ 食^ノ 物^ヲ 又有^リ 和歌本草^{雖^{トモ}レ} 有^リ 助^ケ 于^ニ 病^ノ 家^ノ 撰^用 用^ニ 所^レ 載^{スル} 不^レ 多^{カラ} 凡^ノ 諸^ノ 家^ノ 之^ノ 倭^ノ 名^ノ 誤^ル 者^亦 多^シ 今^マ 此^ノ 篇^ヲ 爲^{ニシテ} 庖^ノ 厨^ノ 人^ノ 易^{カラ} 撰^用 用^シ 而^レ 編^ム 故^ニ 俗^ノ 語^ノ 俚^ノ 言^ノ 雜^ノ 書^ス 庶^ニ 乎^{シカ} 小^ニ 補^{アルニ} 病^ノ 家^ノ 日^ノ 用^ニ 乎

【訓読】

○凡そ、倭名の書、源氏の『倭名鈔』有り、林氏の『多識篇』有り、中村氏の『訓蒙図彙』有り、俱に学者の参考に便じて、食物・薬品の性味を載せず。深江氏の『倭名本草』有り、延寿院の『日用食性』有り、安田氏の『食品』有り、俱に医者 of 自考に便じて、病家の撰用に便あらず。其の『倭名本草』は、薬品を載せて、食物を載せず。又、『和歌本草』有り、病家の撰用に助け有りと雖ども、載する所多からず。凡そ、諸家の倭名誤る者、亦た多し。今、此の篇、庖厨人の撰用し易からんが為にして、編む。故に、俗語・俚言、雑書す。庶くば、小補あるにしか、病家の日用にせられんことを。

【試訳】

○総じて、倭名を記載した書物に、源順氏の『倭名類聚鈔』、林羅山氏の『多識篇』、中村惕斎氏の『訓蒙図彙』があるが、これらはいずれも、学者の参考のためには便利だが、食物や薬品の性質と味を掲載しない。深江輔仁『倭名本草』、延寿院の『日用食性』、安田氏の『食品』もあるが、これらはいずれも、医者が自分の参考にするには便利だが、病者が用いるのには不便である。さて、『倭名本草』は薬品を掲載するが、食物を掲載しない。また、『和歌本草』もあり、病者が使って助けにはなるが、掲載量は多くない。およそ、諸家の倭名を誤る者も、また多い。今、この篇『庖厨備用倭名本草』は、料理人が使いやすいように編纂した。そのために、俗語・俚言を雑多に記載した。願わくば、この書が病者の日用に、少しでも役立つように。向井元升撰「巻之首の質疑」から、次のことが確認される。

第一に、倭名（事物の日本語の名称、和名）を記載する書として、向井元升撰「巻之首の質疑」は、①源順『倭名類聚鈔』・②林羅山『多識篇』・③中村惕斎『訓蒙図彙』・④深江輔仁『倭名本草』・⑤延寿院『日用食性』・⑥安田『食品』・⑦『和歌本草』を

挙げた。元升は『庖厨』の編纂にあたって、①～⑦より和名を引用したのであろうか。

「凡^レ倭^ノ名^ノ之^レ書^有リ^ニ源氏^ノ倭名鈔^有リ^ニ林氏^ノ多識篇^有リ^ニ中村氏^ノ訓蒙圖彙^俱便^{シテ}于學者^ノ参^考不^レ載^セ食^ノ物^ノ藥^ノ品^ノ之^レ性^ノ味^ヲ」という文から、①源順『倭名類聚鈔』・②林羅山『多識篇』・③中村惕斎『訓蒙図彙』は、学者の参考に便利であるが、食物や薬品の性質と味に関する記載がないと指摘している。

第二に、「有^リ深^ノ江氏^ノ倭名本草^有リ^ニ延壽院^ノ日用食性^有リ^ニ安田氏^ノ食品^俱便^{シテ}于醫^ノ者^ノ自^考不^レ便^ア于病家^ノ撰^用」と記されているように、④深江輔仁『倭名本草』・⑤延寿院『日用食性』・⑥安田『食品』は、学者や自分の参考にするには便利であるが、病者が用いるのには不便であると元升は、指摘している。⑥安田『食品』という本は、管見の限り、不明であった。

第三に、「其^ノ倭^ノ名^ノ本草^ノ載^テ藥^ノ品^ヲ、不^レ載^セ食^ノ物^ヲ又有^リ和歌本草^雖有^リ助^ケ于病^ノ家^ノ撰^用所^レ載^{スル}不^レ多^{カラ}」という文から、④深江輔仁『倭名本草』は薬品を掲載するが、食品を掲載していない。⑦『和歌本草』は、病者が使って助けにはなるが、掲載量がすくないことが確認される。

第四に、「凡^レ諸^ノ家^ノ之^レ倭^ノ名^ノ誤^ル者^亦多^シ」という指摘から、和名を記載した①源順『倭名類聚鈔』・②林羅山『多識篇』・③中村惕斎『訓蒙図彙』・④深江輔仁『倭名本草』・⑤延寿院『日用食性』・⑥安田『食品』・⑦『和歌本草』という諸家の和名の誤りも多いことが確認される。

第五に、「今^マ此^ノ篇^為ニシテ^ニ庖^ノ厨^ノ人^ノ易^{カラ}ンカ^ニ撰^用シ^テ而編^ム故^ニ俗^ノ語^ノ俚^ノ言^ノ雜^ニ書^ス庶^ニ乎^{シカ}小^ニ補^{アル}ニ病^ノ家^ノ日^ニ用^ニ乎[」]と述べられているように、『庖厨備用倭名本草』は、料理人や一般の患者が使いやすいように、俗語・俚言を雑多に記載している。このことから、『庖厨』は、一般の庶民にも読めるように、和名を重んじていたことが窺える。

3. 『庖厨備用倭名本草』所引『訓蒙図彙』初版本

向井元升撰『庖厨』「卷之首の質疑」では、和名を記載した先行文献として、『訓蒙図彙』を論評する。『訓蒙図彙』版本五種のうち、寛文十一年（一六七一）撰、貞享元年（一六八四）刊『庖厨』より、早く刊行されたのは、寛文六年（一六六六）刊『訓蒙図彙』初版本のみである。従って、『庖厨』「卷之首の質疑」に論評されているのは『訓蒙図彙』初版本である。

『庖厨』には、『訓蒙図彙』初版本の引用が、八項目確認される。この八項目は、①「莪蒿」②「杜父魚」③「海鰻鱺」④「鱈魚」⑤「馬刀」⑥「靈羸子」⑦「竹雞」⑧「秧雞」である。

『庖厨』と『訓蒙図彙』初版本の見出し語が一致するか否かによって、次の三種類

に分類される。

- A. 両者の見出し語が一致するもの ⑦「竹雞」、⑧「秧雞」
 B. 見出し語に一字の相違があるもの ②「杜父魚」、③「海鰻鱺」
 C. 見出し語が異なるもの ①「莪蒿」、④「鱸魚」、⑤「馬刀」、⑥「靈羸子」

『庖厨』の『訓蒙図彙』初版本の引用箇所八項目のうち、見出し語が一致している二例⑦「竹雞」⑧「秧雞」と、一字異なる二例②「杜父魚」③「海鰻鱺」、これを合わせて四例は、すべて和名の引用である。このことから、『庖厨』が、初版本の和名を四例にわたって引用するのは、向井元升が『庖厨』に掲載する和名を収集するために、初版本の和名を引用したと考えた。

4. 『訓蒙図彙』初版本の和名の引用

『庖厨』「庖厨備用倭名本草叙」では、和名は、『倭名類聚鈔』を主な参考とし、『多識篇』を補足として用いたことが記述されている。また、「卷之首の質疑」では、和名を記載した書物として、『倭名類聚鈔』・『多識篇』・『訓蒙図彙』をまず最初に取り上げた。本節では、『庖厨』が、『倭名類聚鈔』・『多識篇』とともに、『訓蒙図彙』「竹雞」「秧雞」「杜父魚」「海鰻鱺」の和名をどのように引用するかを解明する。

- A. 両者の見出し語が一致するもの ⑦「竹雞」、⑧「秧雞」

表1は、「竹雞」の項目について、『庖厨備用倭名本草』と『訓蒙図彙』初版本・『倭名類聚鈔』・『多識篇』との本文を対照したものである。句読点・中黒・鉤括弧や点線は便宜上筆者が付した。【見出し語】【出典】【語義】【向井元升の説】は、『庖厨』の本文によって加えたものである。（以下も同じ）

表1・⑦「竹雞」（ちくけい、やましぎ）

『庖厨備用倭名本草』	『訓蒙図彙』初版本	『倭名類聚鈔』	『多識篇』
【見出し語】竹雞	ちくけい 竹雞		竹雞
【出典】『倭名鈔』ニ「竹雞」ナシ。 『多識篇』ニ「タケノトリ」、 『訓蒙圖彙』ニ「ヤマシギ」、 或云「ウバシキ」。	今按、俗云、 「やましぎ」。 山 ^{さん} 菌 ^{きん} -子 ^し 、「泥 ^{でい} -滑 ^{くわつ} -滑 ^は 」、 並 ^{さん} 同。或云、「山 ^{さん} -和 ^を -尚 ^{しやう} 」、 亦 ^{さん} 同。	×	多計乃登里。 異名 ^{キン} 山菌子 (藏器)。

<p>【語義】考、『本草（綱目）』、「此鳥、多ハ竹林ニヲレリ。其形、鷓鴣ニ比スレハ、ヤ、ホソシ。褐色ニシテ、班オホク、赤文アリ。好テ啼鳥也。其儔ヲミレバ、必ズタ、カフ。又、好テ蟻ヲ食ス」。</p>			
<p>【向井元升の説】○元升曰、此説ノ如キ鳥アラバ、「竹雞」ナルヘシ。「ヤマシギ」「ウバシギ」、イヅレナルラン。又、「杉雞」ト云アリ。常ニ杉樹下ニスム。『本草（綱目）』註ニミエタリ。</p> <p>「竹雞肉」、味甘、性平、毒ナシ。「野雞病」ヲ治シ、蟲ヲコロス。</p> <p>解毒「鷓鴣」ト「竹雞」トハ、常ニ好テ、「半夏苗」ヲ食ス。又、「鳥頭苗」ヲ食ス。故ニ、人多ク、此二鳥ヲ多食シテ、其毒發シタルニハ、生薑ヲ用テヨシ。其説、『本草（綱目）』註ニミエタリ。</p>			

表1から、次のことが確認される。

『庖厨』と『訓蒙図彙』初版本の見出し語は、どちらも「竹雞」である。『倭名鈔』には「竹雞」の項目がない。『多識篇』には「竹雞」に和名「多計乃登里（タケノトリ）」があり、『庖厨』はこれを引用している。

『訓蒙図彙』初版本には、「今按、俗云、やましぎ」とある。『庖厨』は、「『訓蒙圖彙』ニヤマシギ」という形で、『訓蒙図彙』初版本を引用している。

このことから、『庖厨』は、和名の出典として、『倭名鈔』・『多識篇』・『訓蒙図彙』初版本を引用していることが確認される。

表2は、「秧雞」の項目について、『庖厨備用倭名本草』と『訓蒙図彙』初版本・『倭名類聚鈔』・『多識篇』との本文を対照したものである。

表2・⑧「秧雞」（アウケイ、くひな）

『庖厨備用倭名本草』	『訓蒙図彙』初版本	『倭名類聚鈔』	『多識篇』
【見出し語】秧雞（アウケイ）	あうけい 秧雞 やう		秧雞（アウケイ）

<p>【出典】『倭名鈔』ニ秧雞ナシ。 『多識篇』ニ和名ナシ。</p> <p>『訓蒙圖彙』ニク井ナ。</p>	<p>今按、くひな。 或云、^あ龍^{てう}-鳥。俗^{すい}名^一水^二- 雞^{けい}ト、然^トモ水^ハ-雞^ハ是^{よう}鷓^一- 渠^{きよ}ノ一^一名。今按俗云、ばん。</p>	×	<p>(『食物』)、 トウケイ 鷓雞</p>
<p>【語義】考『本草（綱目）』、大サ、小雞ノ如ニテ、頬白ク、嘴長ク、尾短ク、背ニ白斑アリ。多ハ田澤ノホトリニ居ル。夏至ノ後ハ、夜鳴テ、旦ニ至ル。秋後ハ、鳴コトナシ。又一種アリ、鷓雞ト云、秧雞ノ類也。大サ、雞ノ如ニテ、長脚、紅冠也。雄ハ大ニシテ色褐、雌ハヤ、小ク色班也。秋ハナシ。其声甚タ大ナリ、是モ食スヘシ。</p>			
<p>【向井元升の説】○元升曰、此説ノ如キハ、「ク井ナ」ニ非ス。「ク井ナ」ハ、大サ「小雞」ノ如クニテ、頸ヤ、長ク、脚高ク、尾短ク、其色黒シ。田澤ノホトリニ居テ、夏至ノ後ニ、終夜鳴明スモノナレトモ、白頬・白斑ナルニアラス。又、褐色ナルニ非ス、然トモ、田澤ニ居テ、夏ハ終夜鳴明スハ、相同ジケレバ、同類ニテ形色ノカハリタルニヤ。凡鳥獸蟲魚草木ニ至ルマテ、同類異形ノモノ多シ。ヒトリ此鳥ノミニ非ス。「ク井ナ」ハ、『倭名鈔』ニ「龍鳥」トカケリ、形「水雞」ニ似テ、ヨク「龍」ヲ食フトイヘリ。今俗ニ、皆、「水雞」二字ヲ「ク井ナ」トヨメリ。又按、鷓雞ハ、和名「バン」ト云。鳥ニヨク似タリ。秧雞肉、味甘、性温、毒ナシ。蟻瘻ヲ治ス。</p>			

表2から、次のことが確認される。

『庖厨』と『訓蒙図彙』初版本の見出し語は、どちらも「秧雞」である。『倭名鈔』には「秧雞」の項目がない。『多識篇』には「(『食物』)、鷓雞」という本文はあるが、「秧雞」の和名がない。

『訓蒙図彙』初版本には、「今按、くひな」とある。『庖厨』は、「『訓蒙圖彙』ニク井ナ」という形で、『訓蒙図彙』初版本を引用している。

B. 見出し語に一字の相違があるもの ②「杜父魚」、③「海鰻鱺」

表3は、「杜父魚」の項目について、『庖厨備用倭名本草』と『訓蒙図彙』初版本・『倭名類聚鈔』・『多識篇』との本文を対照したものである。

表3・②「杜父魚」—『庖厨備用倭名本草』「杜父魚」と『訓蒙図彙』「杜父」—

『庖厨備用倭名本草』	『訓蒙図彙』初版本	『倭名類聚鈔』	『多識篇』
【見出し語】 杜父魚（トホキヨ）	とほ 杜父		杜父魚
【出典】『倭名鈔』ニ杜父魚ナシ。 『多識篇』ニイカリウヲ、 『訓蒙圖彙』俗ニ云、ウシヌスヒト。	今按、俗云、うしぬすびと。 又云、いしもち。杜-父- 魚-也。土-鮪、土-鮒、 土附、蓋皆同。	×	今_案、伊 加利宇於。
【語義】考『本草(綱目)』、一名「渡父魚」、 一名「船疋魚」。 溪澗ノ中ニ生シテ、長サ二三寸ナリ。ア ヒ吹沙ニ似テ短ク、其尾マタアリ、頭大 ニ、口ヒロク、其色黄黒ク、春マタラ也。 人ヲミレハ、啄ヲ泥土ニサシ入テ、船ノ 疋ノ如シ。			異名 ^{センテイ} 船疋 魚（『綱- 目』）。
【向井元升の説】○元升曰、此形モ、ハ ゼニ似タリ。杜父魚、味甘、性 温、毒 ナシ。此魚、小兒ノ差類ヲ治ス。			

表3から、次のことが確認される。

『庖厨』の見出し語は、「杜父魚」であり、『訓蒙図彙』初版本の見出し語は、「杜父」である。『庖厨』の出典として、『倭名鈔』に「杜父魚」の項目はない。『多識篇』「杜父魚」の本文「今_案、伊加利宇於（今案ずるに、いかりうお）」に和名「イカリウヲ」があり、『庖厨』はこれを引用している。

『訓蒙図彙』には、「今按、俗云、うしぬすびと」とある。『庖厨』は、「『訓蒙圖彙』俗ニ云、ウシヌスヒト」という形で、『訓蒙図彙』初版本を引用している。

表4は、「海鰻鱺」の項目について、『庖厨備用倭名本草』と『訓蒙図彙』初版本・『倭名類聚鈔』・『多識篇』との本文を対照したものである。

表4・③「海鰻鱺」—『庖厨備用倭名本草』「海鰻鱺」と『訓蒙図彙』「海鰻」—

『庖厨備用倭名本草』	『訓蒙図彙』初版本	『倭名類聚鈔』	『多識篇』
【見出し語】海鰻鱺（カイマンリ・ ハモ ）	かいまん 海鰻 ずいもあん		海鰻鱺
【出典】『倭名鈔』ニ海鰻鱺ナシ。 『多識篇』ニウミウナギ、 『訓蒙圖彙』ニハム。	今按、 はも 。 蓋唐音之誤也。 くぎよ わ くぎよ じまん 狗-魚、獨-狗-魚、慈-鰻 れい はく まん -鱺、並同。或云、白-鰻。	×	宇美宇那岐。 異名 ^う 狗魚 （『日-華』）
【語義】考『本草（綱目）』、其総詳ナラス。但、云、東海中ニ生ス。鰻鱺ニ類シテ、大也。云云。			
【向井元升の説】○元升曰、唐俗ニ、「ハム」ヲ海鰻ト云。「ハム」ハ海中ニ生ス。此魚ハ、「ハム」ナルヘシ。海鰻鱺、味甘、性平、毒ナシ。皮膚ノ悪瘡・疥疔・腫ヲ治ス。又痔瘻ヲ治ス。李九華曰、其煖レトモ、補ハス			

表4から、次のことが確認される。

『庖厨』の見出し語は、「海鰻鱺」であり、『訓蒙図彙』初版本の見出し語は、「海鰻」である。『庖厨』の出典として、『倭名鈔』に「海鰻鱺」の項目はない。『多識篇』「海鰻鱺」の本文に和名「宇美宇那岐（ウミウナギ）」があり、『庖厨』はこれを引用している。

『訓蒙図彙』元禄版本には、「今按、はも」とある。『庖厨』は、『訓蒙圖彙』ニ、ハムという形で、『訓蒙図彙』初版本を引用しているが、見出し語「海鰻鱺」の和名に「ハモ」がある。

5. 『庖厨備用倭名本草』「巻之首の質疑」における薬効

『庖厨』「巻之首の質疑」は、『訓蒙図彙』に「食物・薬品の性味」がないことを次のように指摘している。

【本文】

凡^レ倭^ノ名^ノ之^ノ書^{有^リ}源^{氏^ノ}倭名^{鈔^ニ}有^リ林^{氏^ノ}多識^{篇^ニ}有^リ中^{村^{氏^ノ}}訓蒙^{圖彙^ニ}俱^ニ便^{シテ}于^ニ學^{者^ノ}參^{考^ニ}不^{スレ}載^セ食^{物^ノ}藥^{品^ノ}之^ノ性^{味^ヲ}

【訓読】

凡そ倭名の書、源氏の『倭名鈔』有り、林氏の『多識篇』有り、中村氏の『訓蒙図彙』有り、俱に学者の参考に便じて、**食物薬品の性味を載せず**。

太字「食物薬品の性味を載せず」によれば、源順『倭名類聚鈔』、林羅山『多識篇』、中村惕斎『訓蒙図彙』には、食品や薬品の特質と味を記載していない。つまり、『庖厨』から、『訓蒙図彙』の薬効・効用などの必要性に関する指摘がみられる。

『訓蒙図彙』①初版本②頭書本③無刊記本と、④元禄版本⑤寛政版本の記載内容は、大きく異なる。本節では、『訓蒙図彙』版本五種における「蓼」をあげて、④元禄版本は、向井元升の指摘を生かして、④元禄版本に薬効の記述を増補したことを論じる。

表5は、『訓蒙図彙』版本五種における「蓼」の本文を対照して示したものである。

表5・『訓蒙図彙』「蓼」

	①初版本	②頭書本	③無刊記本	④元禄版本	⑤寛政版本
見出し語	蓼	蓼	蓼	蓼	蓼
ふりがな漢名	れう	れう	れう	れう	れう
和名	たで	たで	たで	たで	たで
	○青 ^{せい} -蓼 ^{れい} あをたで	○青 ^{せい} -蓼 ^{れい} あをたで	○青 ^{せい} 蓼 ^{れい} あをたで		
	しれう ^し -蓼 ^{れう} あかたで	しれう ^し 蓼 ^{れう} あかたで	しれう ^し 蓼 ^{れう} あかたで		
「今云」	すいれう ^{すい} -蓼 ^{れう} 今云いぬたで	すいれう ^{すい} -蓼 ^{れう} 今云いぬたで	すいれう ^{すい} -蓼 ^{れう} 今云いぬたで		
語義	葉 ^ハ -上 ^ニ 有 ^ル 黒 ^ク -點 ^ト 者 ^{ナリ} - 也	葉 ^ハ -上 ^ニ 有 ^ル 黒 ^ク 點 ^ト 者 ^{ナリ} 也	葉 ^ハ -上 ^ニ 有 ^ル 黒 ^ク 點 ^ト 者 ^{ナリ} 也		

薬効				^た で ○ ^た 蓼はくはくらん をやめ水 ^{すい} 気 ^き おもて うき ^う ばれたる ^ら を ^を 治 ^ち し ^し 目 ^め を ^を 明 ^あ に ^に す	^た で ○ ^た 蓼はくはくらん をやめ水 ^{すい} 気 ^き 面 ^{めん} う ^う き ^き ばれたる ^ら を ^を 治 ^ち し ^し 目 ^め を ^を 明 ^あ に ^に す
----	--	--	--	--	--

表5から、本文の構成として、①初版本とこれに対応する②頭書本・③無刊記本は、①初版本と同じで、①初版本を忠実に継承する。しかし、④元禄版本は下位分類、「今云」注記と語義を削除して薬効を増補している。⑤寛政版本は、④元禄版本を継承していることが確認される。

①②③の本文構成は、第一に、見出し語「蓼」に対して、漢名「れう」をふりがなで示し、和名「たで」を掲げている。第二に、下位分類として「○」で区切って「青-蓼」「紫-蓼」の語を掲出し、各々「あをたで」「あかたで」の和名を示す。また、「水-蓼」の語を掲出し、「今云」注記によって「今云いぬたで」の和名を示し、語義を「葉-上^ル有^ル黒-點^者-也（葉上に黒点有る者なり）」としている。つまり、①②③は和名・下位分類・語義を重視している。

しかし、④元禄版本は、この編纂方針を大きく転換している。

第一に、見出し語「蓼」に漢名「れう」をふりがなで付し、和名「たで」をあげるのところまでは、①②③を継承している。

第二に、①②③の下位分類である「青-蓼」と和名「あをたで」、「紫-蓼」と和名「あかたで」、「水-蓼」と「今云」注記「今云いぬたで」、語義の全体を削除して、①初版本にはない薬効を増補している。つまり、④元禄版本は、和名「たで」を「蓼」の唯一の和名として掲げ、それ以外の下位分類と「今云」注記、語義記事の代わりに、すべて薬効に費やしている。

このことから、④元禄版本は、薬効を増補するために、①②③の文字数を、少しでも減らす必要があった。そのために、「今云」等の注記を削除して、薬効にその分の文字数をまわしたことが窺える。

一方、①②③では、向井元升が指摘した「食物薬品之性味」を掲載しない。『庖厨備用倭名本草』の後に成立した『訓蒙図彙』④元禄版本は、この向井元升の指摘を生かして、④元禄版本に薬効の記述を増補したのではないか。

第三に、④元禄版本に次ぐ⑤寛政版本は、④元禄版本と同様、見出し語「蓼」に漢名「れう」をふりがなで示し、和名「たで」と薬効を示しているが、④元禄版本の薬効記事における「水気」「おもて」の表記とは異なり、「水気」「面」に改めている。

このように、④元禄版本の薬効・効用の記述は、向井元升の指摘「不^スレ 載^セニ 食- 物薬- 品^ノ 之性- 味^ヲ」を生かして増補されたことが明らかにした。

むすび

向井元升撰『庖厨備用倭名本草』は、『訓蒙図彙』初版本刊行の五年後に成立した、江戸期最初の本草書である。料理人や一般の患者が使いやすいように、俗語・俚言という和名を雑多に記載している。

『庖厨備用倭名本草』の引用書目として、漢籍は李東垣の『食物本草』、李時珍の『本草綱目』を参考にしている。和書は、源順の『倭名類聚鈔』、林羅山の『多識篇』と『訓蒙図彙』初版本を用いた。『庖厨備用倭名本草』所引『訓蒙図彙』初版本の八項目のうち、和名を引用するのは四例である。向井元升が『庖厨備用倭名本草』に掲載する和名を収集するために、『訓蒙図彙』初版本の和名を引用したと考えた。

一方、『庖厨備用倭名本草』「巻之首の質疑」は、『訓蒙図彙』に「食物・薬品の性味」がないことを指摘する。『庖厨備用倭名本草』の後に成立した『訓蒙図彙』元禄版本は、この向井元升の指摘を生かして、元禄版本に薬効の記述を増補したのではないだろうか。

※底本とした諸本は次のとおりである。

『訓蒙図彙』①初版本：国立国会図書館蔵〈一一七一一八〉寛文六年（一六六六）刊山形屋版本。

『訓蒙図彙』②頭書本：武庫川女子大学附属図書館〈DIG-MKWU-一〇二四六〉寛文八年（一六六八）刊山形屋版本。

『訓蒙図彙』③無刊記本：東京芸術大学付属図書館蔵〈DIG-TKGL-四七〉。石上阿希氏は、寛文九年（一六六九）～元禄五年（一六九二）刊とする。

『訓蒙図彙』④元禄版本：国立国会図書館蔵〈特一一一九四〇〉、元禄八年（一六九五）刊本。

『訓蒙図彙』⑤寛政版本：国立国会図書館蔵〈特一一一六一四〉、寛政元年（一七八九）刊本。

『庖厨備用倭名本草』：国立国会図書館蔵〈特一一一九〇〇〉貞享元年（一六八四）刊本。

『倭名類聚鈔』二十卷：国立国会図書館蔵〈WA七一一〇二〉元和三年（一六一七）刊本。

『多識編』：国立国会図書館蔵〈特一一六七五〉、慶安二年（一六四九）刊本。

注

- (1) 木村陽二郎「中村惕齋の訓蒙図彙について」一一七～一二五頁（『教養学科紀要』第五巻、一九七三年三月、東京大学教養学部教養学科）。
- (2) 小林祥次郎「『訓蒙図彙』解説と索引」九六九～九七五頁（『江戸のイラスト辞典 訓蒙図彙』、二〇一二年十月、勉誠出版）。
- (3) 石上阿希「江戸のことは絵事典『訓蒙図彙』の世界」三一三～三三〇頁（二〇二一年三月、角

川書店）。

- (4) 楊世瑾「『訓蒙図彙』寛文六年初版本から元禄版本へ—大衆化の位相をめぐって—」二六頁（『文化・情報の結節点としての図像—絵と言葉でひろがる近世・近代の文化圏—』、二〇二一年三月、晃洋書房）。
- (5) 拙稿「江戸の絵入り百科事典『訓蒙図彙』の「今云」注記」（『外国語学研究』第二六号、二〇二四年十二月刊行予定、大東文化大学大学院外国語学研究科）。
- (6) 注（1）の前掲論文一—二頁。

[附記] 本稿を成すにあたって、藏中しのぶ先生、相田満先生、三田明弘先生、杉山若菜先生、笹生美貴子先生、尹仙花先生、オレグ先生から貴重な御指導をたまわりました。ここに記して、深く御礼申し上げます。